

採 蓮

Siren

第九号

No.9

目次
Contents

採蓮のいわれ 4
The Implication of "Siren" 5

図版
Plates 6

リアルワールド——現実世界 スイス現代美術展 水沼啓和 11
Talking about the Real World: Contemporary Swiss Art Mizumura Hirokazu 37

橋本正司の彫刻作品——本館所蔵作品の紹介 藁科英也 19
Hashimoto Shoji Sculptures in the Chiba City Museum of Art Collection Warashina Hideya 35

寄託作品紹介《椿図屏風》について 松尾知子 36
Introducing Camellia Screens on Deposit at the Chiba City Museum of Art Matsuo Tomoko 48

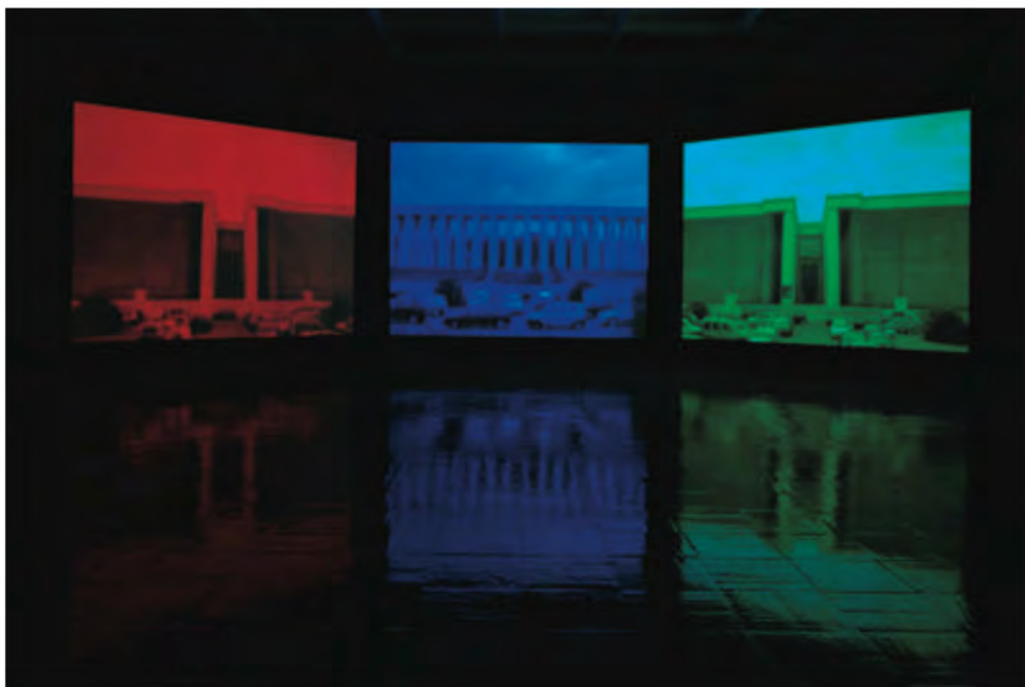
平成十七年度 千葉市美術館の活動 49
Fiscal Heisei 17 Activities of Chiba City Museum of Art

リアルワールド——現実世界——スイス現代美術展

「リアルワールド——現実世界——スイス現代美術展」は、二〇〇五年十二月十七日から二〇〇六年二月二十六日まで、MAMCOのフランソワーズ・ニンゲット氏の監修、スイス・プロヘルヴェティア文化財団の協力のもと、千葉市美術館を会場に開催された。この展覧会には、「現実世界」から引用した素材を用いてミクストメディア的、インターメディア的作品を制作する中堅・若手のスイス人アーティスト、シルヴィー・フルーリ、ファブリス・シージ、シャリヤー・ナシャット、モゼール&シュヴァインガー、ウーゴ・ロンディノーネが参加した。

本展の出品作はすべて、ヨーロッパの展覧会で既

出の作品かその別ヴァージョンであり、純粋な意味における新作ではない。そのため展覧会初日に発行したカタログには、初出時の写真と作家解説のみを掲載し、千葉市美術館での展示風景は割愛した。とはいえ、出品作の大半を占めるミクストメディア的、インターメディア的インスタレーションは、展示される場所や方法次第でその形態や性格が大きく変わるため、出版物のかたちで展示記録を残す事が望ましいことも確かである。幸い、今回この紀要にスペースを得ることができたので、ここに「スイス現代美術展」の展示風景と作品解説を掲載させていただきます。



シャリヤー・ナシャット

Shahryar Nashat

隠蔽と探索

Hide and Seek

2005

3面スクリーン・4枚のDVD (エンドレスループ)

Courtesy of the artist, Praz-Delavallade, Paris and Elisabeth Kaufmann, Zurich

イラン生まれ、ジュネーヴで教育を受けたシャリヤー・ナシャットにとつて、ヨーロッパ文化やフランス語は、自らの所有物であつて自らの所有物でない。この複雑なアイデンティティが、ナシャットの作品に一貫して影を落としてきた。

《隠蔽と探索》は、疑古典主義様式の建造物ムーゼオ・デッラ・チヴィル・タ・ロマーナを、3つのスクリーンに投影したヴィデオ・インスタレーションである。われわれ日本人にとつて、ノスタルジックな風景の一部にすぎない疑古典主義様式の建物も、植民地支配を経験した国の人々の目には、宗主国の権威を象徴する抑圧と暴力の表象と映る。さらにこの建物を計画したのがベニト・ムッソリーニであるという事実も、シメトリックな様式の裏側に隠蔽された抑圧性や暴力性をより強めているように思われる。しかしながら、ムッソリーニ様式に見られる合理主義や理性主義は、ファシズムのイデオロギー固有の要素ではなく、西洋の思想的伝統に由来することを見逃してはならない。実際の展示では、この建物特有の威圧感が、数十秒おきに画面全体を覆う原色のカラーフィルターと、フィルターがあるときだけ流れる苦しうな人間の吐息によつて、さらに増幅される。

スイスのソルトウレン美術館における《隠蔽と探索》の最初の展示では、十六・九のワイドサイズ画面が用いられたが、千葉の展示では、四・三サイズの画面が採用された。十六・九チップを搭載する高輝度プロジェクターは依然として高価であり、四・三サイズを用いた方がより大型の画面を実現できるという理由からだ。また十分な広さを持つ展示室一の空間に合わせ、三面スクリーンの配置も初出時の凸型ではなく、凹型に変更された。

第五十一回ヴェネツィア・ビエンナーレ(二〇〇五)のスイス代表の一人に選出されたナシャットは、当初、この《隠蔽と探索》を出品作として提案したが、スイス館キュレーターのシユテファン・バンツ(Sieffan Bantz)が出品に難色を示したため、ビエンナーレのための作品を新たに制作することになった。そして生み出された新作が、今回展示室二に設置された《規制する線》である。ルーブルにあるルーベンスの《マリイ・ド・メデイシスの生涯》の間を舞台に撮影された《規制する線》とこの《隠蔽と探索》は、ともにイラン出身のナシャットと西洋文化の複雑な関係を反映する点で共通する。彼自身も《隠蔽と探索》と《規制する線》が不可分であると考えており、千葉で二作品を同時に展示することを強く望んだ。(なお、《規制する線》はシングルチャンネルヴィデオのため、展示写真は掲載しない。)



ウーゴ・ロンディノーネ
Ugo Rondinone

スリープ
Sleep

1999

白い木製の棚・白いフレームの額に入れた165点の写真（タイプcプリント）・サウンド・15個のスピーカー
写真: 522×722mm×27、422×622mm×65、322×472mm×38、272×397mm×35

白い棚: 330×1470cm、330×630cm

Collection: Hauser & Wirth Collection

Courtesy: Galerie Eva Presenhuber

《スリープ》は、一九九九年から二〇〇〇年にかけて、ヨーロッパ五カ所を巡回したロンディノーネの個展「Guided by Voices」で発表された。グラス・クンストハウスにおける初出時の展示では、展示室の隅にL字型に設置された長大な白い棚に、額装された一六五点の写真が架けられた。《スリープ》は基本的にサイズ可変なため、「コブラ・ミュージアムにおける『The Art of Falling Apart - Works from Hauser & Wirth Collection』展をはじめ、仮設の棚を使用せずに、ギャラリーの壁に直接写真を設置した例も見られる。

これに対して千葉市美術館では、初出時に棚の背後に置かれた原色フィルムター付きスポットライトが割愛されたことを除けば、棚のサイズと仕様、写真の配列、スピーカーの数と位置等、オリジナルの展示がほぼ忠実に再現された。にもかかわらず、スポットライトによるサイケな光が省略された結果、ハイキーな写真と幻想的な音楽が前面に押し出され、《スリープ》は静謐な印象の作品へと大きく変貌した。

一六五点におよぶ《スリープ》の写真には、浜辺を歩く男性と女性、浜辺の風景が、様々な角度から全て異なる構図で撮影されている。男性も女性も、極端なアップで写る場合もあれば、はるか彼方から撮影され、風景のなかに小さく佇んでいる場合もある。これらがランダムに配列されることで、見るものに無目的でエンドレスな印象を与える。特筆すべきは、同一のフレーム内に男と女が一緒に収まる写真が一点もないことだ。この事実が、二人の関係をめぐる様々な憶測を見るものに懐かせる。

無表情で動きを欠いた男女の姿、露出オーバー気味に撮影された白日夢のようなイメージ、それらがげだるく幻想的な雰囲気漂わせる。棚のスピーカーからエンドレスで流される重苦しいヴォーカル曲も、この独特の雰囲気盛り上げるのに一役買っている。《スリープ》というタイトルも、この曲のなかで何度も繰り返される以下のような一節に由来する。「眠る。私は目覚める事ができない。何日も目を閉じつづな。 (sleep, I can't wake up, I haven't closed my eyes for days...)」



シルヴィー・フルーリ
Silvie Fleury

フレーム
Flames

1999
壁に蛍光塗料
380×1695cm
Courtesy: Gallery Side 2, Tokyo

283シェビー
283 Chevy

1999
クロームメッキされたブロンズ
71×45×70cm
エディション 3/4
Courtesy: Art & Public, Pierre Huber, Switzerland

383モーパー・スペシャル・ポリス (ダッジ)
383 Mopar Special Police (Dodge)

1999
クロームメッキされたブロンズ
73×60×68cm
エディション 3/4
Courtesy: Art & Public, Pierre Huber, Switzerland

400ポンティアック
400 Pontiac

1999
クロームメッキされたブロンズ
70×58×76cm
エディション 3/4
Courtesy: Art & Public, Pierre Huber, Switzerland



シルヴィー・フルーリ
Silvie Fleury

ストライプのウォールペインティングとハイヒールのサウンド
The Eternal Wow

2005
壁面に塗料、靴音のサウンド
380×1610cm
Courtesy: Gallery Side 2, Tokyo

シルヴィー・フルーリは、高級ブランド品やそのイメージを引用することで知られるが、その文脈の延長線上で、F1をはじめとする自動車レースのイメージも好んで作品に用いてきた。燃料を大量に消費しながら猛スピードで疾走するレース・カーも、現代消費文化が持つ華やかさと浪費性を象徴するからである。

展示室四に設置された壁画《フレーム》と三つのエンジンのブロンズキャストも、ドラッグレースに素材を求めた作品である。アメリカ生まれのドラッグレースは、超ハイパワーエンジンを搭載した二台のホットロッドカーが加速スピードを競い合う、単純明快なカーレースだ。このホットロッドカーのボディに描かれる炎模様を拡大した壁画の前に、コンクリートの台座に載せたエンジンを並べるインスタレーションを、フルーリはこれまで幾度か試みてきた。

《フレーム》は単独で展示されることも多く、そのヴァリエーションは十数に及ぶ。千葉市美術館のための新ヴァージョンでは、オレンジとライトグリーンの配色による炎模様が、L字型壁面に二パターン構成された。フルーリは自分自身で作品を制作することはほとんどなく、今回の壁画も、彼女の指示書に基づいて日本人画家たちの手により描かれた。壁画の直前に等間隔で置かれた三つのエンジンも、彼女の指示に基づき、実物のチューンアップエンジンから铸造されたブロンズキャストである。ドラッグレースの豪華さと迫力を演出するために、エンジンの表面全体にクロームメッキが施されている。

展示室八に設置された《ストライプのウォールペインティングとハイヒールのサウンド》の新ヴァージョンは、ベルリンのメイディ・チョークリで発表されたファーストヴァージョンとは全く異質な作品へと変貌を遂げた。初出時には青から赤紫、赤紫から青へとスペクトル状に塗り分けられていたストライプが、今回の展示では黒に近い茶色一色のみで描かれたことにより、視覚的イリュージョンがより強調される結果となったためだ。すなわち、壁の純白とストライプの黒茶色が目を刺すような強烈なコントラストを生み出したことで、ストライプの湾曲部分が鑑賞者の動きとともに左右に揺れ動くという、一種の錯視現象を引き起こしたのである。これは、ジュリオ・ル・パルクやヘス・ラファエル・ソトラによるオップ・アートと同じ原理に基づく視覚効果である。Eternal Wow(無限の揺れ)という原題も、この効果に基づいて名付けられた。

また今回の展示では、ファーストヴァージョンに使われた流れ落ちるクリーム形のプラスチックが省略された代わりに、ハイヒールのサウンドが新たに追加された。突然どこからともなく聞こえてくるカツカツという靴音が、ストライプの幻想的イリュージョンを強め、鑑賞者に不思議な感覚をもたらす。

作者自身も認めているように、ストライプを黒に近い単色にしたことで、この作品は、ダニエル・ビュランのパロディとしての側面も兼ね備えることとなった。フルーリは、パステルカラーのフェイクファアを貼付けたモンドリアンの絵画やジョン・マックラッケンのミマル彫刻など、これまでも二十世紀美術のパロディ的引用を幾度か試みてきたが、千葉のストライプをこれらの延長線上に置くことも可能であろう。



フレデリック・モゼール & フィリップ・シュヴィンガー
Frédéric Moser & Philippe Schwinger

抑留区域

Internment Area

2002

舞台セット、DVD (28分18秒)

Courtesy: Fine Arts Unternehmen206, Switzerland and Play Gallery for still and motion picture, Berlin

モゼール&シュヴィンガーは、一九八八年から九一年、ローザンヌを拠点とするインディペンデント・シアター「アトリエ・イン・エマントゥナン」で共同ディレクターを務めたのち、一九九三年から九八年、ジュネーヴのスクール・フォー・ヴィジュアル・アーツでミクストメディアを専攻した。彼らが演劇とアートの中間領域で仕事を行う背景には、この異色のキャリアが存在する。

《抑留区域》は、演劇を記録したビデオを上映する傍らに、その演劇で使われた舞台セットを展示するという、彼ら独自の作品形式を用いている。このタイプのビデオ・インスタレーションは、劇を映像化することで舞台と観客のあいだに生じた時間的、空間的、心理的距離を、展示室内に再現した舞台上から映像を鑑賞させることよって再び縮小するという、複雑なプロセスを特徴とする。千葉の展示でも、展示室五に《抑留区域》のオリジナルの舞台が再現され、それと向き合う壁に日本語字幕入りの映像が上映された。

モゼール&シュヴィンガーの近作が持つもう一つの特徴は、演劇史から特定の題材を選び出し、独自の解釈により再演を行う点にある。《抑留区域》では、一九五〇年代から六十年代頃に実践された精神療法師ヤコブ・J・モレノの方法論に基づき、本来患者とセラピストによるロールプレイングとして展開する心理療法を、俳優を使って独自の視点から再現した。モレノが設計した心理劇用の舞台も、この作品のために忠実に再現された。

物語は、主人公の青年ギョームに心理治療を行うセラピストたちが次々と介入することで、即興的に展開していく。周囲の人物やギョームの別人格に扮したセラピストたちが、彼をとりまく困難な状況を再現し、主人公の心の奥底に潜む言葉を引き出そうと試みる。

《抑留区域》をはじめとする近年のビデオ・インスタレーションにおいて、モゼール&シュヴィンガーは、単に歴史的演劇を再現するだけでなく、コミュニケーションのプロセス自体を解説しようと試みている。観客と俳優、そして俳優と俳優のあいだに直接的な関係が生じる演劇は、制御されたコミュニケーションの様々なプロセスを理想的に再現するのに適しているのだ。



ファブリス・シージ
Fabrice Gygi

大テント

Grande Tente

1994

キャンヴァス・金属・木

250×200×300cm

Collection: Musee d'art moderne et contemporain (MAMCO), Geneva

エアバッグ

Airbag Generation

1997

キャンヴァス・送風機

500×100×500cm

Courtesy: galerie Bob van Orsouw, Zurich

トーラックス

Torax

2004

ステンレス

85×65×55cm

Courtesy: galerie Chantal Crousel, Paris

グレーのモノクローム

Monochromes Gris

2003

着色された防水布

300×150cm×7

Courtesy: galerie Bob van Orsouw, Zurich

展示室七には、真っ赤なエアバッグをモノトーンの作品群が取り囲むかたちで、ファブリス・シージによる四つの作品が展示された。制作時期が多岐に渡るこれらの作品は、それぞれ異なる意味を持つにもかかわらず、《トラックス》以外は防水布という同一の素材を用いているために、一つのインスタレーションとして違和感無く調和した。

九十年代以降、シージは警察用・軍用の装備を展示室内に再現し、独創的なインスタレーションを構成してきた。社会制度のなかで明確な機能を持つ不穏な品々を展示することで、シージはそれらを生み出した制度自体がもつ攻撃性・暴力性を顕在化させ、「現実世界」に潜む様々な権威を表象化しようと試みてきた。軍用テントの外観を忠実に模した《大テント》は、この傾向を代表する作品のひとつである。

災害や事故に関連する装備品も、九十年代以降、シージが繰り返し引用してきた素材である。《エアバッグ》は、災害時に使われる緊急避難用品であるが、シージによつて展示室内に据えられるとき、本来の機能とは対照的な「遊具」としての役割を与えられる。千葉市美術館でも、展示室中央に設置された《エアバッグ》の上で、子供たちが寝転んだり飛び跳ねたりして歓声を上げていた。けれどもこの遊具としての側面と、災害時にビルから飛び降りる人々を受け止めるというエアバッグ固有の機能を照らし合わせたとき、この作品の辛辣な二面性が突如として浮かび上がってくる。

同種の二面性は、パワーシャベルの先端部を再現した《トラックス》にも見られる。ユーモラスな形態を持つこの作品は、防水布を用いた作品で埋め尽くされた展示室内に吊るされることで、ある種の効果的なアクセントとして機能していた。しかしその一方で、《トラックス》の攻撃的な形態が、パワーシャベルと同時に中世の拷問具を参照していることに気づく者は少ない。

《グレーのモノクローム》は、これまで論じてきた作品とは幾分異なる二面性を持つ。この作品は、一見すると、五十年代から六十年代にかけて世界中で流行したモノクローム絵画に近いが、実際は、トラックの幌などに使われる防水布をグレーに着色したものにすぎない。グレーの塗料に覆われたこの作品の均質な表面は、近くで見ると限り防水布そのものであるにもかかわらず、矩形のフレームに張られ、美術館の展示室内に七点並べて架けられる事で、一種の疑似絵画として機能してしまう。

Talking about the Real World: Contemporary Swiss Art

Mizunuma Hirokazu

The Chiba City Museum of Art held an exhibition entitled *Talking about the Real World: Contemporary Swiss Art* from December 17, 2005, through February 26, 2006. This exhibition directed by MAMCO's Françoise Ninghetto introduced works by Sylvie Fleury, Fabrice Gygi, Shahryar Nashat, Frédéric Moser & Philippe Schwinger, and Ugo Rondinone. These young and mid-career Swiss artists are currently attracting international attention, and are known for boldly transforming motifs and images from the "real world" into large-scale installation works.

All of the works included in this exhibition had been displayed in European exhibitions or were variations of previously exhibited works. Hence, the catalogue for the Chiba exhibition, published on the first day of the exhibition did not include any photographs of the Chiba installation itself. The majority of the exhibited works were mixed media or intermedia installations, and naturally, positioning and the method of installation greatly affect the form and character of installation works. With the sense that a record and some images of the Chiba gallery installation should be preserved in published form, this journal article presents photographs of the works installed in Chiba and a brief explanation of each work.

(Translated by Martha McClintock)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第九号

二〇〇六年三月三十一日発行

編集・発行 | 財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

二六〇一八七三 千葉市中央区中央三一十一八
電話 〇四三一三二一三三二一(代)

編集担当 | 松尾知子

制作 | 印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.9

March 31, 2006

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X